

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第187号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成29年3月21日

ユキホオジロ



2016.11.11 石狩湾新港付近（石狩市）

撮影者 高畑政敏（札幌市西区）



も く じ

中国シマアオジワークショップ参加報告
 NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク 長谷部 真…………… 2
 シマアオジに想いを寄せて(続)…………… 7
 北海道の市街地のスズメ生息数の動向 美唄市 藤巻 裕蔵…………… 8
 江別市越後沼でカンムリカイツブリの繁殖を確認
 江別市 中田 達哉…………… 10
 鳥類標識調査でスゲヨシキリとキガシラセキレイを記録
 広 報 部…………… 11
 北海道におけるセグロセキレイとハクセキレイの種間つがい
 上士幌町 川辺 百樹…………… 12
 野幌森林公園探鳥会におけるダイサギの記録 広 報 部…………… 13
 野鳥情報コーナー
 オジロビタキの観察記録 札幌市南区 深沢 修…………… 14
 可憐な迷子～モリムシクイに会う～
 札幌市豊平区 佐伯 武美…………… 14
 稚内市宗谷村でサバクヒタキに遭遇 北広島市 先崎 理之
 札幌市北区 北沢 宗大…………… 15
 探鳥会ほうこく…………… 16
 鳥 民 だ よ り…………… 17
 表紙の鳥(ユキホオジロ) 札幌市西区 高畑 政敏…………… 17
 探鳥会あんない…………… 18

中国シマアオジワークショップ参加報告

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク 長谷部 真

シマアオジとの出会い

私は2003年に東京から釧路の環境コンサル会社に就職するために北海道に渡って来ました。それ以来、長らくシマアオジを見たことがありませんでした。初めに住んでいた釧路では、釧路湿原にある温根内木道にシマアオジがいると聞いていましたが、シマアオジ目的に観察に行くことはありませんでした。そのうち、シマアオジが減っているらしいということは、環境省のレッドリストの改訂で知ることになりました。初めてシマアオジに出会ったのがウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメなどの海鳥調査をしていた天売島でした。驚いたことにシマアオジは草地ではなく、天売島の港のコンクリートのそばの草地にいました(写真1)。シマアオジが渡ってくるのは5月下旬と



写真1 シマアオジ雄 2013年5月26日 天売島

言われていますが、まさにその頃でした。

サロベツのシマアオジ

サロベツから100km南の羽幌町に住んでいた頃に、年に1回くらいエゾカンゾウが咲く頃にサロベツには遊びに来ていましたが、あえてシマアオジを見ようという気持ちもなく、見たことはありませんでした。サロベツ湿原センターにきた2015年には、時期になるとシマアオジはサロベツ湿原センターの木道から簡単に観察することができました。そこには多くのカメラマンや野鳥愛好家がシマアオジを目的に観察に来ていました。ちょうどその頃、2015年に発表になったKamp氏の論文には「シマアオジの急激な減少は世界的に起こっており、有力な原因の一つとして、中国における密猟が挙げられている」と書かれていました。そして、どうも国内でシマアオジはサロベツにしかいないらしいという話を関係者から聞きました。もし、国内でシマアオジがサロベツにしかいないことが本当なら、すぐにもサロベツにどのくらいシマアオジが生息しているか調べなければなりません。サロベツ湿原センターの木道近くのシマアオジが生息している環境は中間湿原でした。サロベツの植生図から中間湿原や少し前までに生息していた高層湿原が分布しているところを割り出し、シマアオジを探しに行きました。しかし、調査をした限り、シマアオジを発見することはできませんでした。1970年に行われた北海

道開発局による調査でサロベツのシマアオジは高層湿原や中間湿原における優占種で、湿地林、牧草地、海岸・川沿いの草原にも生息していました。様々な情報を合わせると、1990年代頃から減少し、中間・高層湿原以外から姿を消し、その分布も年々狭まってきたようです。つい何年前までシマアオジが観察できた旧サロベツ原生花園木道の高層湿原でもシマアオジの姿は見あたりませんでした。サロベツの自然に詳しい方に話を伺ったところ、もはや湿原センターの木道周辺くらいでしかシマアオジはいないのではないかという話でした。サロベツも例外ではなく、近年においてもシマアオジの分布が縮小し続けており、絶滅寸前であることがわかりました。これといった対策を行わないまま2016年になり、今年はシマアオジは帰ってくるか心配していましたが、帰ってきたのを確認できてほっとしました(写真2)。この気持ちは、天売島のウミガラスに対して、毎年抱いていたことでした。しかし、ウミガラスは15つがい位いるのに対して、サロベツのシマアオジは5つがい程度…だと思えます。過去の記録によると8~9月頃までいたそうですが、2016年は7月中旬になるとパタッと見かけなくなったので、繁殖が成功したのかもよくわかりません。おそらく、国内で最も絶滅に近い鳥類だと思えます。ちょうどその頃、国内のシマアオジの生息情報を調査している人がサロベツにきました。その人はあちこちで関係者から話を聞くことで、シマアオジの生息情報を極秘に調べていましたが、結局サロベツ以外の生息情報はなかったようでした。ウミガラスやシマフクロウなどの絶滅危惧種の存在はかなり前から知られており、保護増殖事業などによる対策も行われてきましたが、シマアオジは何も保全措置がされていません。数十年前まで普通種で、急激に減少してきたので、対応が追いついていないのは仕方がないかもしれません。しかし、サロベツ湿原センターの木道周辺で比較的簡単に観察できるがために、サロベツに行けばシマアオジに会える、木道周辺にいるなら湿原の奥地に行けばたくさんいるだろうと思われて、危機感が乏しくなっているのだと思えます。



写真2 シマアオジ雌 2016年6月 サロベツ

日本鳥学会2016年札幌大会

そんな折、2016年の日本鳥学会の大会は札幌の北海道大学で開催されることになりました。道北の風力発電問題にも取り組んでいたもので、風車関連の自由集会で道北の風力発電事業による鳥類への影響について発表して欲しいと頼まれ、札幌大会に参加することになりました。大会ではシマアオジに関する自由集会もありましたので、シマアオジの自由集会に参加して、サロベツの現状を訴えたいと考えていました。残念なことに、風力発電とシマアオジの自由集会の時間が重なってしまいました。仕方がなく、サロベツのシマアオジの現状を口頭発表することにしました。そこで、傍聴していた鳥類関係者(ちょっと前の自分も含む)すらシマアオジの現状についてよくわかっていない人が多いことに気づきました。ましてや一般の人が知るよしもありません。口頭発表を終えた帰り道に、ぱったり会った日本野鳥の会の葉山政治氏に、シマアオジの自由集会に参加できずとても残念である旨を伝えたところ、「11月にシマアオジの今後の保全対策を考える国際会議が中国であるのだが、よかったら北海道代表としてサロベツの報告をしてきたらどうかね」との誘いを受けました。前述のとおり、近年のシマアオジの減少の主な原因は中国などの海外にあるとされているので、国内でできることはなく、絶滅するのをただ指をくわえて待っているしかないと思っていました。中国に働きかけようにも、どうしたらいいのかわかりません。これはサロベツの現状を直接伝えるまたとなない機会です。「もし可能なら、ぜひ参加したいと思います」「わかった、シンバ(バードライフインターナショナルでシマアオジの保全に取り組んでいて、シマアオジ自由集会の主催者。シンバ・チャン氏)に伝えておくよ」葉山さんはそう言い残して去って行きました。鳥学会が終わり、サロベツに戻って半信半疑の気持ちでいると、シンバ・チャン氏からシマアオジワークショップへの招待状が届きました。

中国シマアオジワークショップ

シマアオジワークショップは中国の広州市にある中山大学で2016年11月2日から4日まで3日間開催されました。サロベツからは、稚内から札幌、札幌から成田と2回も飛行機を乗り換えて広州に向かいました。広州は上海に次ぐ中国第2の人口1500万人の都市で、首都北京より大きいです。広州のホテルに着いたのは夜11時くらいでしたが、南国らしく夜の町は賑わっていました。稚内は11月初めに早くも雪が降り、道路は凍結していましたが、広州は秋にあたり、暑くも寒くもありませんでした。宿泊していたホテルは中山大学内にあり、シマアオジワークショップの会場も兼ねていました。来る前にグーグルアースで場所を確認したところ、大都市だったので野鳥はあまり見られないかと残念に思っていたのですが、古い歴史を持つ大学の構内は照葉樹の大木が生い茂っていました。冬鳥が多く鳥観察に絶好の季節だということなので、早起きをして朝食前に鳥

の観察に行きました。まだ明るくなり始めた頃でしたが、構内の木々は野鳥の声であふれていました。道には通勤・通学する多くの人が行き交う傍ら、広場では静かに太極拳に興じている人もいました。あとでわかりましたが、大学構内は有名な採鳥地になっているとのことでした。しかし、高木の照葉樹なので、鳴き声は聞こえども姿を見ることはなかなかできませんでした。毎朝通った結果、国内では珍鳥の部類に入るクロウタドリ、大型ヒタキのシキチョウ、日本では外来種であるシロガシラ、ガビチョウ、ハッカチョウ、カノコバト、日本の在来種であるメジロ、コサメビタキ、スズメ、ハシブトガラス、ハクセキレイなどを観察することができました。

各国のシマアオジの生息状況

シマアオジワークショップはバードライフインターナショナルが主催し、シマアオジの繁殖地・中継地・越冬地であるロシア、モンゴル、日本、韓国、中国、香港、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーなどの鳥類関係者60名ほどが出席しました(写真3)。日本からは、私のほかに山階鳥類研究所の尾崎清明氏、日本野鳥の会の葉山政治氏、バードリサーチの植田睦氏が参加しました。



写真3 シマアオジワークショップ会場

まず、ワークショップの世話役であるシンバ・チャン氏が中国・香港における食用としてのシマアオジの歴史や、越冬地の東南アジアでも食用や宗教行事用でたくさん捕獲されていることを報告しました。次に、北海道野鳥だより184号にも記載されていますが、2015年に論文を発表したドイツ人のKamp氏がシマアオジの世界的な減少を報告しました。ロシアのモニタリング地点では1980年代から90%ほど減少しており、生息範囲の西縁は5,000km東に後退していました。捕獲による減少率を換算したところ、その減少傾向にびったりとあてはまっていました。中国では1997年にシマアオジの捕獲は禁止されていますが、近年になっても大量捕獲が摘発されているため、減少傾向が止まっていないのだと思います。シマアオジはカムチャツカから中国北東部、モンゴル、カザフスタン、ヨーロッパ、ロシアまでのユーラシア北部などで繁殖していますが、それらの多くが、中国の主に海岸に近い地域を通して東南アジアや

インド亜大陸北部の越冬地に向かっているとされています。繁殖地とは異なり、中国の渡りの中継地では群れで移動することが多いため、かすみ網で一網打尽にされ、大きく減少したのではないかと考えられています。

繁殖地のロシアの発表では、サハリン、アムール地方、バイカル湖周辺におけるシマアオジの生息状況が報告されました(Ktitorov P氏、Wieland Heim氏ほか)。サハリンでは、1970~80年代には島内全域でごく普通に生息していましたが、90年代から2000年代になるとあまり姿がみられなくなりました。2016年の調査では南部では絶滅したとされており、中部ではわずかに残っており、北部では比較的多いという状況でした。アムール地方のある地域では1999年から2015年まで生息数が50%減少しました。ここでは湿原における火入れが減少の一要因になっている可能性があります。ロシアの他の地域でも減少しており、バイカル湖畔では1979~1990年までに足環を付けるためにシマアオジ1万羽以上が捕獲されましたが、2012~2015年に捕獲されたのはわずか9羽でした。モンゴルでは河川沿いの湿地で繁殖し、過去と比べて減少傾向にありました(Batmunkh D氏)。減少の要因としては過放牧、干ばつなども挙げられました。日本では生息地が1箇所、絶滅寸前であることを私が報告しました。

中継地のうち、韓国の報告では、離島で2008~2015年にかけては渡りの時期に数十羽単位でシマアオジが標識調査で捕獲されていました(Kim Jin-Han氏)。渡りの季節は春より秋の方が多く、全体的に近年は減少傾向にありました。中国では、海岸に近い地域の59箇所、361羽が確認され、3箇所の市場で30羽が食用に販売されていました。香港では1959年に3,000羽の群れが確認されていましたが、1990年代になると数百羽単位に減少し、2000年以降は25羽程度に減少していました(Yat-tung Yu氏)。渡りの時期は春より秋に数が多い傾向でした。

越冬地のカンボジアの報告によると(Vorsak B氏)、シマアオジは群れで渡ってきていますが、その数は近年減少傾向にありました。減少の原因として、食用としての野鳥の捕獲、野鳥市場の存在、生息環境である氾濫原の農地への転用が挙げられました。一方でバードライフインターナショナルにより、生息調査や鳥獣保護区の設定、シマアオジの重要性を啓蒙するための環境教育や猟師に他の産業に従事するよう促す活動が行われていました。タイの報告によると(Sutasha K氏)、シマアオジは1930年のバンコクで普通に生息する冬鳥とされており、田んぼや竹林で数千羽が捕獲されていました。1974年には冬に2百万羽がタイの寺で捕獲され食べられていました。近年のバンコクの高級ホテルでは中国から輸入されたシマアオジが1羽20ドルでレストランに提供されていました。タイを含む仏教国では放生会ほうじょうえという殺傷を戒めるために鳥を放つ宗教儀式でシマアオジが捕獲されており、放つ前や放つ後にあわせて7割くらいが命を落としているとの報告がありました。このほか、バングラディッシュやネパールでも

減少傾向との報告があり、最西端の生息地であるフィンランドではすでに絶滅していました。

シマアオジのモニタリング調査・保全対策の取り組み

今回のシマアオジワークショップの正式名称は「黄胸鷄及迁徙陸鳥保護国際研究会」でした。日本語に直すと「シマアオジと陸生渡り鳥保護の国際検討会」です。今回は減少が著しいシマアオジに焦点が当たっていますが、検討内容に陸生の渡り鳥も含まれていました。シマアオジ以外に、カシラダカが大きく減少していることがわかっています。カシラダカの繁殖地はシマアオジと同様ですが、越冬地が日本と中国という点が異なります。カシラダカも各地で減少しており、フィンランド、スウェーデン、日本では過去30年で80%程度減少したことが明らかになりました（Wieland Heim氏、尾崎清明氏）。カシラダカは第2のシマアオジになる可能性があり、今後は新たに他の種も同様に減少する可能性があります。このため、今後は過去との比較と、減少した場合はその原因の究明が可能となるように各国で調査体制を整えることが重要です。過去の調査結果は、日本でシマアオジの分布が減少したことを示す証拠として実際に利用されました。しかし、今回の各国におけるシマアオジの報告ではロシア、日本、韓国を除くと、現状と比較するための調査が過去にほとんど行われてないことが明らかになりました。今後に備えて、各国では調査体制を整えることが重要との観点から、日本で継続的に行われているモニタリングサイト1000・全国鳥類繁殖分布調査（植田陸之氏）・標識調査（尾崎清明氏）の結果が紹介されました。いずれの調査でもシマアオジが減少したことが示されました。日本では離島以外渡りの季節に通過しないとされていましたが、標識調査結果から過去には各地で数例の記録があり、シマアオジが減少した近年では全く記録がなくなっていたことが明らかになりました。

今後は中国や東南アジアの越冬地においてシマアオジの密猟や捕獲をいかに防止するかということが最重要の課題です。今でこそ日本では密猟はほとんど行われていませんが、過去には日本におけるかすみ網による鳥類捕獲の禁止後に密猟が横行していました。この状況を改善するために、かすみ網の所持や販売を規制するに至った取り組みを葉山政治氏が紹介しました。日本は生物調査や保全の面で、いつも欧米に遅れを取っていると感じていましたが、中国や東南アジアの各国にとって十分に学ぶべきことがあることがわかりました。

中国で何も対策がされていない訳ではありません。香港や中国では近年、野鳥の会などが新たに結成されるなどして、野鳥愛好者の人口が増えています。それらの野鳥関係者が中国南部でかすみ網による密猟の監視、環境教育、野鳥観察会の開催、人材育成、政府に対する働きかけ、パンフレットの作成、新たな鳥類保護団体の立ち上げなどにより、絶滅危惧種の保全のための普及啓発活動を行ってきたことがわかりました。その活動の成果は絶滅危惧種である

ヘラシギの個体数の増加として現れていました。

香港ではシマアオジをはじめとする鳥類などの多様な生物が生息できるように米や様々な湿性の商品作物を栽培する多自然型農業（日本でいうと里山に近い）が行われ、地域の環境保全団体が支援していました（写真4）。有機栽培を行うことで、多くの鳥類や生物が生息し、シマアオジの個体数も増加傾向にありました。環境保全団体が中心となって農作業を支援するほか、鳥類観察会、勉強会を行うことにより、普及啓発の場として活用されていました。また農地で収穫された米や作物は自然にやさしい農作物として付加価値を付けて販売されていました。



写真4 香港の多自然型農地

シマアオジ国際保全計画に向けた話し合い

各国の報告や調査・保全対策の報告がなされた後に、調査研究、保全、普及啓発の3班に分けて、今後の保全計画について話し合われました（写真5）。この3つの分類に明確に分けることは難しいですが、調査研究ではシマアオジの渡り経路の解明、過去の分布拡大と近年の減少要因の特定、亜種の解明などの必要性が話し合われ、保全では、密猟防止、捕獲・かすみ網などの法規制、国際的な流通の規制、火入れの防止などによる生息環境の保全、農薬・除草剤を利用しない多自然型農業の推進が話し合われ、普及啓発では、環境教育・勉強会による周知、野鳥愛好者増加の推進、環境保全の人材育成、シマアオジを保全するための意識の向上、政府への働きかけによる政策転換について話し合われました。日本のシマアオジの絶滅を防ぐために、サハリン・北海道・南千島の個体群が独立亜種かの解明、サハリン北部の卵を利用した人口孵化が提案されました。

香港における野鳥観察会

シマアオジワークショップの後、電車で2時間ほど乗って広州から香港に移動しました。香港は都会のイメージですが、冬の香港は探鳥地としても楽しめる場所です。インターネットで航空写真を見ると緑が豊かな山で覆られてい



写真5 シマアオジの国際保全計画作成に向けた話し合い

ることがわかります。香港大学でシマアオジの発表会と懇親会を行った翌日にロングバリーと呼ばれる多自然型農地を見学し、野鳥観察を行いました。農地では湿性の作物が植えられており、セイタカシギ、タカブシギ、ソリハシセイタカシギ、シロハラクイナ、クイナ、レンカク、アカガシラサギなど日本でも見られる種がいました。農地では、ホオジロハクセキレイ、ノビタキ、タカサゴモズ、ツメナガセキレイがいて、シマアオジも2羽観察することができました(写真6)。観察の後、小さな建物の中で農地での取り組み、生息する生物、収穫した有機栽培の米「生態米」(写真7)について説明してもらいました。この日はちょうど収穫日にあたり、田んぼでは市街地から来た多くの市民が収穫作業を手伝っていました。香港で水田はここにしかないので、重機を使わず、手作業と小さい機械を使っていました。

午後からはマイボ自然保護区に鳥の観察に行きました。ここはマングローブ林と魚の養殖池から成る湿地で、400種の鳥類が観察できる渡りの中継地になっており、1995年にラムサール条約湿地に登録されました。ここはWWF(世界野生生物基金)が1983年から管理しており、保護区内にはビジターセンター・観察小屋・木道などが設置さ



写真6 香港の多自然型農地の稲に生息するシマアオジ
2016年11月



写真7 シマアオジが生息する多自然型農地で収穫された「生態米」

れ、鳥類の観察会なども行われています。保護区は中国本土との境界に位置しており、その間には高い柵が張り巡らされていました。ロングバリーとは異なり、水鳥が主で、日本でもなじみのアオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アカガシラサギ、シロハラクイナ、カイツブリ、イソシギ、ソリハシセイタカシギ、ハシビロガモ、アカハジロ、マイボの目玉となっているクロツラヘラサギなどがいました。猛禽類ではノスリ、ミサゴ、カラフトワシがいました。陸鳥はシロガシラ、ジョウビタキ、シマキンバラ、オナガ、カササギ、クビワガラスなどがいました。保護区の中に漁の作業小屋があり、鳥類の保全と漁業が両立されていました。今では、シマアオジの姿はみられないようですが、保護区設立当初はシマアオジが生息していたらしく、ビジターセンターの展示にはシマアオジの姿がありました。

ワークショップを振り返って

ワークショップ後に、香港大学での発表会、2つの異なる環境における鳥類観察会がありました。会議だけだと十分にうちとける余裕がなく、話をする前に終わってしまう面がありましたが、香港大学での発表会をしたことにより、香港の人たちとも仲良くなり、鳥類の観察を一緒にしたことにより、お互いを認識し、今後どうしたらよいかじっくりと話し合うことができました(写真8)。今回ワークショップに参加したうち、ロシア人、ドイツ人、スペイン人のヨーロッパ系の人の英語は堪能でしたが、香港の人も皆英語力に優れ、ワークショップを運営する面でも重要な役割を果たしていたと思います。また、地元の広東語を話せるので、中国での活動にも関わる際の橋渡しの存在が期待されます。国際的な場において意思をしっかりと疎通できることの重要性を改めて感じました。

今回のワークショップで各国から関係者と情報を集め、有意義なワークショップとなったのはこれらの関係者の協力はもちろんですが、バードライフインターナショナルの世話係であるシンバ・チャン氏の存在が非常に大きかったと思います。彼は香港出身なので広東語を母国語とし、英



写真8 香港での懇親会

シマアオジに想いを寄せて (続)

前号に引き続き、読者の皆様から寄せられた声を掲載します。投稿していただきました皆様、本当にありがとうございます。
(編集部) 掲載順不同

シマアオジの思い出など

シマアオジといえば、初夏の湿原で高茎草本や低木のでっぺんに止まり、くちばしを高く空に向け胸を張ってさえずる、栗色と黄色のさわやかな姿が思い浮かびます。

ところで、予期しない場所でシマアオジに出会い、感動した2つの記録を紹介します。いずれも繁殖地へ向かう途中の個体と思われました。

1983年5月15日、小樽市張碓海岸での出来事です。その日は、アオバトの飛来状況を観察するため、海に面した崖の上から双眼鏡でのぞいていました。そのとき足元から伸びたミズナラの高木の細い横枝に黄色い鳥の姿が映りました。鳥の方向を見上げると、そこにいたのはシマアオジでした。腹部の黄色が目立つきれいな雄で、印象的でした。

札幌方面から電車で小樽へ向かう途中、小樽築港駅の海側に大型商業施設(ウイングベイ小樽)が現れます。この施設は1999年3月にオープンしたのですが、施設が建つ前は更地の状態で、草原性鳥類などの格好の生息場所になっていました。そこは、国鉄時代はSLの小樽築港機関区、後には貨物ヤードなどに利用されてきましたが、時代の流れとともにその役割を終えて解体され、砂利敷きの更地になっていました。更地には、フキ、ヨモギ、オオバコ、オオイタドリなどが茂り、ヒバリ、モズ、ノビタキ、ホオアカ、コヨシキリ、コチドリ、イソギギなどが繁殖していました。1993年4月11日には1羽のヤツガシラも見られています。

1996年5月26日夕方、貨物ヤード跡地の縁にあるシラカンバの低木にシマアオジの雄2羽を見つけました。2羽のシマアオジは、梢の葉をついばんでいました。17時から17時50分まで観察したのですが、何を食べているのか確認できませんでした。

語も堪能、日本に住んでいるので日本語もできます。彼のネットワークにより、シマアオジの広大な生息域に含まれる日本、中国、香港、東南アジア各国、ロシアの関係者などが一同に会し、初めてのシマアオジの国際会議を中国で開催することができました。このワークショップを機に情報を共有し、シマアオジの保全に関して同じ認識を持つことができ、国際的な取り組みを行うための足がかりができたと思います。この会議に参加したことを今後の保全活動に生かしていきたいと思います。このような会議に出席する機会をいただいたことをシンバ・チャン氏を始め、関係者の方々に深くお礼を申し上げます。

ちょうど20年前のこのころ、鳥類関係者には北海道のシマアオジ生息数は激減していると認識されていたので、想いは複雑でした。
(小樽市 梅木 賢俊)

シマアオジの思い出

私がシマアオジを見たのは、1990年代でした。初めて見た時には、顔の黒さと黄色のお腹のコントラストが鮮やかな印象の鳥でした。その後は観察する機会も殆どないままになっていました。機会が訪れたのは、宿泊探鳥会でした。

2009年7月、もう10年以上も見ていない鳥「シマアオジ」に会えるかもしれないという期待を胸に、サロベツ・ベニヤ原生花園の宿泊探鳥会に参加しました。

サロベツ原野の2日目、早朝。満開のエゾカンゾウの原野で目を凝らして探すと。発見！木道から遠かったものの、嘴いっぱい餌をくわえている雄の姿を見ることができました。近くに巣があるのでしょうか。しきりに警戒しながら餌運びをしていた姿が印象に残っています。

朝霧の中で、10数年ぶりに出会えたシマアオジを見ながら、見ることができたという嬉しい気持ちと、一方で、なぜこの鳥が激減しているのかという疑問もわき、このまま見ることができなくなってしまうのでは、という複雑な気持ちになりました。

2015年6月、北海道野鳥愛護会では、3度目のサロベツ原野宿泊探鳥会が行われました。6年ぶりに訪れたサロベツ原野はビジターセンターが新しく移転し、木道の場所も変わっていました。はたして、シマアオジに再会することができるのだろうか、ちょっと不安でした。幸いにも、参加者全員でシマアオジを見ることが出来、あののびやかでも美しい独特の囀りも聞くことができました。

道内でほとんど見ることができなくなってしまった鳥「シマアオジ」。現状では、せめて個体数が少しでも増えてほしいと願いながらサロベツ原野をあとにしました。

以前は札幌近郊で見ることのできたシマアオジ。我が家の近くの河川敷や草原で、シマアオジが見られる日が来ないだろうかと、密かにロマンを夢見ているが・・・。

(札幌市厚別区 早坂泰夫)

て、室蘭、石狩平野の札幌、江別、岩見沢、美瑛、砂川、滝川（以後「市街地グループA」とする）では減っていたが、石狩平野でも市街地が森林に囲まれている夕張と上砂川、そのほか函館、帯広、釧路（以後「市街地グループB」とする）では大幅に減っていることはなかった（藤巻・一北 2007）。

2011年に調査した市街地17か所のうち、市街地グループBでは観察個体数が10～22羽、市街地グループAでは7～22羽であった（表1）。それぞれの市街地における観察個体数を2006年と2011年とで対比してみると（図2）、市街地グループBを示す点（図2の○）は1か所を除いて45度の線の周辺にあり（45度の線上にあれば個体数に変化がないことを意味する）、個体数に大きな変化がなかったことを示している。一方、市街地グループAを示す点（図2の●）は45度の線の近くと左側にあり、個体数が2006年とほぼ同じか増えていることを示している。

2016年に調査した市街地グループAの10か所で、観察個体数は11～21羽であった（表1）。それぞれの市街地における観察個体数を2011年と2016年とで対比してみると（図

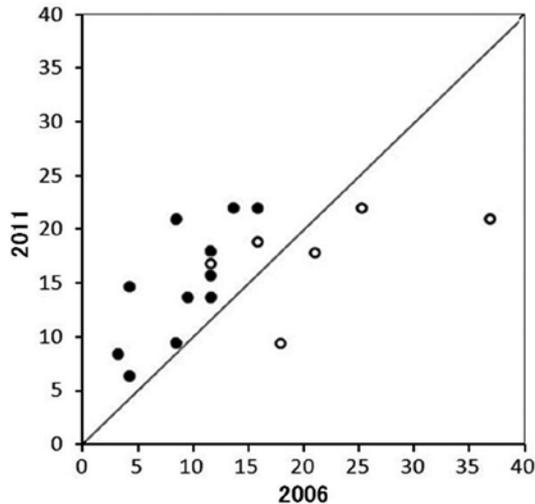


図2. 各調査地における2006年と2011年のスズメ観察個体数の対比

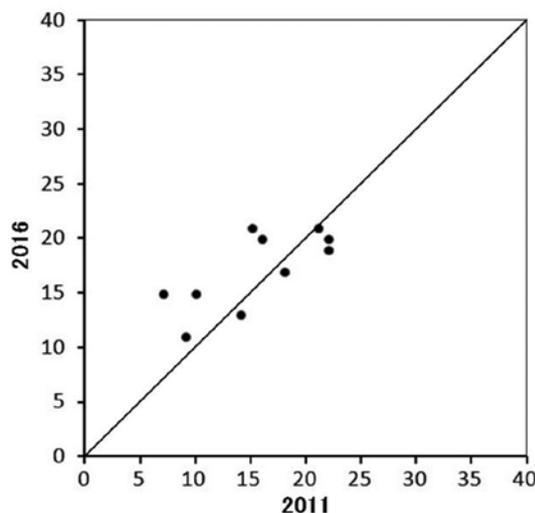


図3. 各調査地における2011年と2016年のスズメ観察個体数の対比

3)、各点はやはり45度の線の近くか左側にあり、この5年間に個体数はそれほど変化しかなかったか、増えていることを示している。

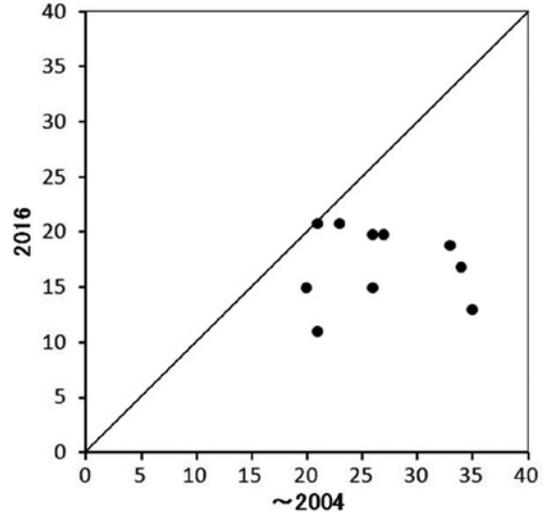


図4. 各調査地における2004年以前と2016年のスズメ観察個体数の対比

2006年から2011年、2011年から2016年とも、市街地グループAでは徐々にではあるが、個体数が増えていると言えるだろう。では、2004年以前に比べるとどうであろうか。最後に、市街地グループAにおける観察個体数を2004年以前と2016年とで対比してみると（図4）、各点の一部は45度の線の上か近くにあるが、多くは右側にあつて、個体数が2004年以前のレベルにまで回復していない市街地が多いことを示している。2006年から2016年までの間に調査した市街地で家並みの状況にはとくに变化した様子は見られなかったというのではないようである。

なお、上記の市街地以外では2006年以降の調査結果しかないが、苫小牧では2006年6月2日に3羽、2011年5月30日に12羽、旭川の2か所では2010年4月26日に4羽と11羽、同年6月7日に5羽と7羽で、市街地グループAなりに観察個体数が少なかった。これら2市の市街地でも以前に比べて個体数が減ったと考えられるような数値である。苫小牧は室蘭と石狩平野の間にあり、旭川は2006年にスズメの死体が見つかった所である。

スズメは1回の繁殖で平均して5～6卵を産み、つがいによっては年に3回繁殖し、他の小型鳥類に比べると増殖率は高いように思える。しかし、一度個体数が減少すると、元に戻るのが難しいのかもしれない。

引用文献

藤巻裕蔵・一北香織, 2007. 北海道の市街地におけるスズメ *Passer montanus* 生息数の動向. 山階鳥類学雑誌 38: 104-107.
 黒沢令子・徳永珠未・小林和也・平田和彦, 2006. 札幌市におけるスズメ激減の記録 (2005/06年冬). Bird Research 2: A19-A24.

江別市越後沼でカムリカイツブリの繁殖を確認

江別市 中田 達哉

カムリカイツブリはこれまで北海道内での繁殖記録がまったくありませんでした(藤巻 2012など)。しかし、2016年8月31日付けの朝日新聞に写真家の富士元寿彦さんがサロベツ湿原でカムリカイツブリの繁殖を確認したという記事が写真付きで掲載されました。この事は後に、モーリーにも詳しく書かれ(富士元 2016)、北海道初のカムリカイツブリの繁殖記録となりました。

日本に渡来するカムリカイツブリは、ヨーロッパからシベリア、オホーツク沿岸まで広く分布する亜種で、日本国内では、一般に冬鳥または旅鳥として記録があります。北海道でも秋から春にかけて、海上や湖沼、河川などで普通に見られます。また、青森県や茨城県、滋賀県などでは繁殖が報告されています(日本鳥学会 2012)。

本種は近年、国内の繁殖分布を拡大していることが知られています(中濱 2013)。今年の2月に出版されたBIRDERの2017年3月号の「鳥たちの繁殖分布域が広がっている!」という特集で、2016年に道南の大沼国定公園で本種の繁殖が確認されたという記事が記載されました。

今まで繁殖が確認されていなかった鳥の繁殖が、1年に2か所も確認されるという事は、北海道の鳥類史においてもかなり稀な例かと思われます。



(写真1) 2016年8月31日

初認から3日後の親鳥と雛(推定5~6週齢)。嘴基部の褐色の斑や顔から首筋にかけての斑が顕著であり、ところどころ幼綿羽がみられた

上記の2例が先に出てしまったため、少し遅い報告となってしまいましたが、2016年に私も北海道でカムリカイツブリの繁殖を観察していました(写真1、2)。

私が本種の繁殖を確認したのは、江別市の越後沼で、8月下旬から10月中旬までの短い期間の観察ではありましたが、育雛から親離れまで観察することができました。

発見当初は、雛が親鳥から給餌を受けていたこと、雛の羽がほとんど生えそっていないことから、繁殖しているのではないかと考えましたが、巣が見つからなかったことや親と雛が1羽ずつしかいなかったこと、観察した雛がそ

の時点で確実に飛べないと判断できる知見を持ち合わせていなかったことから、残念ながら自分自身では本種が繁殖していると断定することができませんでした。

しかし、その後、本種の生態を研究している知人に写真等を見せて相談したところ、孵化した雛の数が少ない場合は片親がいなくなることがあること、この雛は羽色から5~6週齢の雛であると推測され、まだ飛翔能力が無く雛単独での移動は不可能であること、本種の雛は親離れまでに通常8~10週齢ほどかかることから、この場所で繁殖しているのは間違いないという意見を頂きました。ということで、今回道央圏での繁殖を確認という形で報告させていただきます。



(写真2) 2016年9月29日

初認から約1ヶ月後の親と雛(推定9~10週齢) 頭頂部の冠羽が目立つようになり、カムリカイツブリの特徴が少しずつ出てきてはいるが、親鳥と共に行動している

この雛は10月6日に親離れしたことを確認しました。

先の記録を含め、たった1年で道南、道央、道北で繁殖が確認されたカムリカイツブリですが、今後さらに道内で繁殖地を拡大させていく可能性があります。

皆さんが普段観察している湖沼や河川でも今後繁殖する可能性がありますので、もし繁殖期に夏羽のカムリカイツブリを確認した場合は注意して観察してみてください。

参考文献

- 藤巻裕蔵(2012) 北海道鳥類目録 改訂4版. 極東鳥類研究会
- 富士元寿彦(2016) サロベツ原野の逞しきカムリカイツブリ モーリー(45):26-27 北海道新聞野生生物基金
- 長谷智恵子(2017) 北海道で繁殖したカムリカイツブリ. BIRDER 第31巻第3号:42
- 中濱翔太(2013) バードリサーチ生態図鑑「カムリカイツブリ」. バードリサーチニュース 10(7):2-3
- 日本鳥学会(2012) 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会

鳥類標識調査でスゲヨシキリとキガシラセキレイを記録

広 報 部

鳥類標識調査（バンディング）に関わる記事はこれまでも本誌で幾つか掲載されています。この調査では、ご存じのとおり観察とは異なり捕獲して1羽1羽の鳥が識別できる記号や番号がついた標識（足環）を鳥に付して放鳥します。その後回収（標識のついた鳥を見つけ、その番号を確認）することによって、鳥の移動や寿命、羽根による雌雄や形態計測による亜種等の識別、さらには普段は観察しづらい潜行性・夜行性の鳥類の生態など、鳥類の正確な知識（情報）が得られるというものです。

調査は環境省の委託事業で公益財団法人山階鳥類研究所が実施する調査であり、一般的にはかすみ網やわなを使って鳥類を捕獲しますが、これらは技術のある鳥類標識調査員（バンダーという。全国に約450人、うち道内約50人）によって行われており、年間およそ20万羽が標識放鳥されています。

昨年の秋、この調査で我が国でも極めて珍しいスゲヨシキリとキガシラセキレイが北海道内で標識されました。これらについては既に新聞等でも発表がありましたが、道内にもそれら鳥類が飛来通過しているという事実を改めて簡単にまとめてみました。

バンダーの田中正彦さん（亀田郡七飯町在住）、辻幸治さん（千歳市在住）からは、コメントと写真の提供、及び本誌への掲載に快い承諾をいただきました。お礼を申し上げます。

【スゲヨシキリ】ヨシキリ科 ヨシキリ属

亀田郡七飯町で2016年9月14日、田中正彦さんと三上かつらさんにより1羽が放鳥された。日本国内では2012年9月1日に長崎県対馬市で確認されている（正島ほか2013）。本種は旧北区西部の寒帯及び温帯から中央シベリア及び中央アジアで繁殖し、サハラ砂漠以南のアフリカで越冬するとのことである。今回の記録は2例目で、標識記録としては日本初となる。なお、本種は2012年の長崎での



スゲヨシキリ 2016年9月14日 亀田郡七飯町

記録が初めてなので、「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会 2012）には記載されていない。

田中さんによると、捕獲個体は背側上面の褐色の羽色に黒い縦斑模様が混じる点や足色や頭の模様が異なる点、翼の形などが類似種とは違ってみえたという。本来の分布から大きく外れている本種が捕獲されたのが驚きであり、七飯町での記録は偶発的で、荒天のせいかもしれない。謎は大きいですが今回の確認が本種にとって貴重な（ユニークな）記録であることには違いないと言っている。

【キガシラセキレイ】セキレイ科 セキレイ属

苫小牧市ウトナイ湖で2016年10月8日、辻幸治さんにより1羽が放鳥された。本種は、北ウラル丘陵から西シベリア低地・ヒマラヤからモンゴルで繁殖し、インドからインドシナ・中国南部で越冬する。日本には希な旅鳥または冬鳥として渡来する。記録は全国からあるが西日本での記録



キガシラセキレイ 2016年10月8日 苫小牧市

が比較的多い（五百沢ほか 2000）。道内では、迷鳥として浜中、羽幌、利尻富士での確認があり（藤巻 2012）、2009年5月15日の羽幌町での観察記録では詳しい論文もある（岩澤ほか 2013）。

辻さんが2016年から始めたオオジュリン用のヨシ原に張った網でオオジュリンやアオジと一緒に捕獲したという。「随分汚いセキレイだなあ」と、最初はツメナガセキレイかとも思ったが、形態、計測のほか図鑑などで調べるうちにキガシラセキレイであると識別に至った。その後、山階鳥類研究所から日本国内では過去に鹿児島県と茨城県の2例があること、東北、北海道での標識記録としては初であることが知らされた。

参考文献

藤巻裕蔵（2012）北海道鳥類目録 改訂4版 極東鳥類研究会

五百沢日丸 (2014) ネイチャーガイド新訂日本の鳥550
山野の鳥. 文一総合出版
岩澤光子・先崎理之・梅垣佑介・石郷岡卓哉 (2013)
北海道羽幌町におけるキガシラセキレイの亜種
Motacilla citreola calcarata の日本初記録. 日本鳥学会誌

62(2):175-178
日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録 改訂第7版 日本鳥学会
正島和幸・正島喜美枝・高木慎介 (2013) 長崎県対馬にお
けるスゲヨシキリ *Acrocephalus schoenobaenus* の日本初
記録. 日本鳥学会誌62(2):192-194

北海道におけるセグロセキレイとハクセキレイの種間つがい

上士幌町 川 辺 百 樹

長流川の種間つがい

2013年4月22日、伊達市を流れる長流川の上長和頭首工（河口から約5.2km；写真1）で、近づいたセグロセキレイ (*Motacilla grandis*) 雄に対しハクセキレイ（亜種 *M. alba lugens*）雌¹ が体を低くして尾を立てるのを目撃しました。これは雄をなだめる行動です。この雌雄が翌日もここで一緒に過ごしていたことから、「雌がこのままセグロセキレイ雄のナワバリに留まり続ければ、繁殖に至る可能性大です」と本誌172号で報告しました。

半月後の5月7・8・9日に各1回、この頭首工で両者の交尾が見られ、セグロセキレイとハクセキレイがつがいとなっていることを確認しました。巣は頭首工の堰柱の機械室の中이었습니다（写真1）。5月26日に両者が抱卵するのを、6月6・7日に両者が巢内のひなへ給餌するのを観察しました（写真2）。雌雄とも熱心に抱卵と給餌にたずさわっていました。

ハイブリッドの巣立ちを期待して6月12日に頭首工へ行ったところ、機械室の鉄板の接合部の隙間から巣材が引き出され、ひなが消えていました。現場の様子から6月7日から12日の間にハシトガラスに襲われたようです。施設への立ち入りが規制されているため、産卵数やふ化数は調べていません。

この頭首工では前年の2012年4月に独身らしいセグロセキレイ雄が盛んに囀り、ハクセキレイを攻撃していました。翌2014年の5月にセグロセキレイの姿はなく、ハクセキレイのつがいが写真1の一番右の堰柱で巣作りをしていました。2015年は5月にセグロセキレイの雌雄が、種間つがいの巣があった機械室で給餌し、ハクセキレイ雌が一番右の堰柱で巣造りをしていました。2016年5月には他の雄を攻撃するハクセキレイ雄とパートナーとみられるハクセキレイ雌がいました。2014～2016年に種間つがいの再現はありませんでした。

2011～2013年の繁殖期に長流川の全域でセグロセキレイが生息しそうな砂礫川原を調べましたが、セグロセキレイがいたのは上長和頭首工だけでした。空中写真などを見る限り、長流川の近くにセグロセキレイの生息に適した砂礫川原を持つ川はありません。私が確認した上長和頭首工から最も近いセグロセキレイの生息河川は東が39km離れた白老川、西が44km離れた長万部川でした。



写真1. セグロセキレイとハクセキレイの種間つがいが営巣した長流川の上長和頭首工。巣は矢印の機械室の中



写真2. 巢内ひなに給餌するセグロセキレイ雄（上）とハクセキレイ雌（2013年6月7日、長流川上長和頭首工）

一方、ハクセキレイは長流川流域の農地や住宅地に普通に生息し、例えば、上長和頭首工の西側の農地と住宅地からなる約1.6kmの範囲では、2013年の5・6月に繁殖中と思われるハクセキレイを7か所で記録しました。

このように、上長和頭首工は、多くのハクセキレイが生息する地域にある、セグロセキレイの孤立した営巣地です。

た。そして、この頭首工はハクセキレイの営巣場所でもありました。つまり、繁殖期に両種が頻繁に出会うところで、この種間つがいが生じたのです。

種間つがい形成と北海道開拓

私が両種の種間つがいと初めて出会ったのは十勝平野北部の居辺川の川原でした。1976年のことです。この時もセグロセキレイ雄とハクセキレイ雌の組合せでした²⁾。私が2度出会ったということは、北海道ではこの他にも両種の種間つがいできていた可能性が高いでしょう。セグロセキレイの核DNAにハクセキレイの核DNAが入っているという海外の研究者の報告もあります³⁾。両種の種間つがいは極めて特異な事例ではないようです。

両種のもとの繁殖地は、セグロセキレイが日本列島の砂礫川原、ハクセキレイがオホーツク海を取り囲む大陸沿岸部や北海道・千島列島・サハリンなど島嶼の海岸と考えられます⁴⁾。かつて両種の繁殖期の分布はほとんど重ならず、両種が繁殖期に出会うこともほとんどなかったに違いありません。

事態を一変させたのは、19世紀半ばから始まった北海道開拓です。1900年頃に、農地は北海道本島の面積の1割強に当たる8,865km²に達し、居住地や市街地なども981km²になりました。現在では農地や市街地などを合わせると14,300km²ほどになります。これらの開拓によって出現した空間がハクセキレイの繁殖の場となり、ハクセキレイの個体数は著しく増加したとみられます⁴⁾。

一方、セグロセキレイは開拓後も砂礫川原を主たる営巣地としています。この砂礫川原をもつ河川が北海道では限られています。そのためセグロセキレイの営巣地を取り囲んで多くのハクセキレイが生息するという状態に

なりました。

こういう状況下では、同種の雌とつがいになれずにいるセグロセキレイ雄のなわばりに、ハクセキレイ放浪雌(営巣地に定着していない雌)が入ることもあるでしょう。こんな出会いのなかで、ハクセキレイ雌がセグロセキレイ雄に攻撃されることなく、なわばりに留まり続けた場合に種間つがい形成されると推測されます。

つまり、北海道開拓がセグロセキレイとハクセキレイの繁殖期の分布の障壁を取り払うとともにハクセキレイを増やして、両種が種間つがいとなる機会を作り出したといえるでしょう。

今後も両種が種間つがいとなる可能性大です。彼らの巣を見つけた際には、種間つがいになっていないか、ぜひ確認してください。

- 1) セグロセキレイの羽色変異個体にはハクセキレイのように過眼線をもつものがあるとの報告(樋口広芳・平野敏明,1983.セグロセキレイの羽色変異個体. Strix, 2:76-84.)があるので注意しなければなりません、今回の雌の羽色は北海道で繁殖期に見られる一般的なハクセキレイ雌のものであったことから、ハクセキレイ *M. alba lugens* と判断しています。
- 2) 川辺百樹, 2006. セグロセキレイとハクセキレイの種間つがい形成要因. ひがし大雪博物館研究報告28:23-38.
- 3) Alström P. and Mild, K., 2003. Pipits and Wagtails. Princeton University Press.
- 4) 川辺百樹, 2007. 日本列島におけるセグロセキレイとハクセキレイの種間関係. ひがし大雪博物館研究報告 29:21-44.

野幌森林公園探鳥会における ダイサギの記録

広 報 部

昨年(2016年)10月9日の当会野幌森林公園探鳥会においてダイサギが記録されました。探鳥コース途中にある大沢の池で確認されたものです。野幌森林公園探鳥会では過去には観察されたことはなく、これが初記録です。

15年ほど前から野幌森林公園を毎日のように歩き、大沢の池の水鳥の観察も続けている松原寛直さん(当会幹事)によると、ダイサギは9月22日に14羽が確認され、その後少しずつ減っていき、26日に3羽となり、27日以後は一週間ほど確認できなかったそうです。10月になって、3日に2羽、4日から9日までは1羽、10日から12日までは不在、そして13日の1羽が最後ということです。日付や個体数については、松原さん以外の人の目撃記録があるかもしれませんが、それほど大きくは変わらないのではと思われます。

そもそも野幌森林公園にダイサギが飛来したこと自体、

松原さんが確認した9月22日が初めてのこともかもしれません。9月29日には瑞穂の池でも1羽が見られたそうです。近年、北海道各地でダイサギがよく見られるようになってきていますが、野幌森林公園でも確認できたことは、ダイサギの生息分布拡大を考える上でも貴重なことと思われま



野幌森林公園大沢の池のダイサギ 2016.10.4

撮影 早坂泰夫さん

野鳥



情報コーナー

オジロビタキの観察記録

札幌市南区 深沢 修

2016年10月28日に札幌市豊平区豊平公園でオジロビタキを見たので報告します。28日10時頃、冬鳥でも来ていないかと公園の様子を見に行くと、例年コマドリが出没するところにコマドリが出たとのことで、カメラマンが6～7人その場所を占拠していました。私の見る場所が無く、仕方がないのでコマドリが出る前方に回り込むと、地面と柵のロープの間でチョココマカと動いている小鳥がいます。一瞬、コマメビタキかと思いつく何枚か撮影しましたが、何かが違うと思ひ画像を見直すと、尾羽の両端が白い。もしかして、オジロビタキではないかと思ひ、近くにいたカメラマンに確認したところ、それらしく見えるとの返事。私も初見の鳥ですので識別に苦慮しましたが、図鑑を見比べてオジロビタキとしました。今秋から公園内では古い建物の取り壊し予定があり、工事区域内を大きく塀で囲っていて、オジ



オジロビタキ 2016年10月28日 札幌市豊平区

ロビタキはその中で体力を回復していたようです。11月4日まで、ほぼ毎日オジロビタキを観察、撮影することができました。かなり長期の滞在だと思ひます。希な鳥と思ひますので、無事に旅を続けて欲しいと願っています。

可憐な迷子 ～モリムシクイに出会う～

札幌市豊平区 佐伯 武美

2016年11月末、200を超えるヒレンジャクの群れが、札幌市豊平区天神山緑地の上空を舞いました。12月4日、その後、天神山緑地に居ついたヒレンジャクを鳥仲間4人で撮影していたところ、ふと背後の落葉松林に目をやると、見慣れぬ小さな鳥が枝から枝へ飛び移る姿が目に入りました。カラ類と異なり、動きがやや緩慢なのが注意を惹きました。時刻は正午前、目線よりかなり上なので、下面がよく見えました。

腹はきれいな白色、喉から胸のあたりは明るい草色でした。目線にやや近くなった状態で見ると、上面はセンダイムシクイやウグイスに見られる所謂“国防色”ではなく、きれいな草色で、眉斑が鮮やかな黄色だったのが印象的でした。その間10分あまり、夢中でシャッターを切りました。

「センダイムシクイじゃないか」「でも頭中央線がない」「眉斑がやけに黄色い」「お腹がすごく白い」仲間と話し合っても種名の結論は出ませんでした。ムシクイと見当はつきましたが、何しろセンダイムシクイの知識しかありません。その日一晩は図鑑と首っ引きでしたが、見つけまし

た。モリムシクイの特徴の記述が撮影した写真に酷似、しかも「日本では稀な迷鳥として、北海道と舳倉島で記録がある」とありました(図鑑は2000年版)。

「えらいことになった」と思ひ、当会会長の樋口孝城さんに相談したところ、北海道大学大学院の先崎理之さんが識別の労を引き受けてくれることになりました。私の撮った写真を基に先崎さんは、1)眉斑を含む頭部と上面が黄緑色なこと、2)胸以下がかなり白っぽいこと(=頭部の



モリムシクイ 2016年12月4日 札幌市豊平区



モリムシクイ 2016年12月8日 札幌市豊平区

黄緑色と胸以下の白色のコントラストが強い)、3)翼帯や頭央線がないことなどから、モリムシクイと同定しました。他のムシクイ類との違いも詳細にあげてくれましたが、それは煩瑣になるので省きます。

先崎さんによると、本州方面での記録は少なからずある

ようですが、北海道で観察されたのは、1991年の苫小牧での標識記録以来、今回が2度目のようで、写真に収めたのは私が初めてかもしれません。

12月8日、あの日以来、初めて天神山緑地に来てみました。大雪が降った後でもあり、さすがにもうないだろうと思いましたが、なんとまだ逗留していました。同じ落葉松の枝、同じような時刻にその姿を認めました。その時には、目線はもとより地面近くまで下りてくれました。興奮した最初の日より少しは冷静に観察できました。光線の加減で、翼の色合いが前回より、より鮮明・複雑に見えました。黄緑色とばかり思っていた上面の風切羽や雨覆羽には、褐色が混じっているのがはっきりと見分けられました。そして、白くふっくらとした、愛らしい姿が、枝に積もる雪の中でなんとも可憐でした。

しかし、この日を最後にその姿が見られなくなってしまいました。2日後には、札幌では29年ぶりという大雪が降り、ハイタカが絶えず出没する環境の中で、生き抜いて南に行き着けたことを願っています。

2016年は私にとって、忘れられない年になりました。Life Listにオジロビタキと、このモリムシクイが加わったからです。

稚内市宗谷村でサバクヒタキに遭遇

北広島市 先崎 理之
札幌市北区 北沢 宗大

2016年11月4日、オオワシ・オジロワシの渡りで名高い稚内市宗谷岬近くで、サバクヒタキに遭遇しました。

当日は未明より湿った雪が降り、強い北西風が吹き荒れていました。午前11時過ぎ、ワシ類の渡りが気になり、稚内市宗谷村付近の国道238号線を猿払方面から宗谷岬方面に車で北上していました。路面凍結のため、のろのろと走行していたところ、突然右側の海岸から見慣れない姿形の小鳥が飛び出しました。ただならぬ雰囲気のかげしい小鳥の出現に、恐る恐る車を止め、その鳥を肉眼で追いかけます。その鳥は、しばらく上空を舞った後に、車前方のイタドリの枝に止まりました。その姿を即座に双眼鏡で覗きます。すると、なんとその鳥は、背面の砂色が美しいサバクヒタキだったのです。

このサバクヒタキは、すぐにイタドリを飛び立ち、道路わきの消波ブロックの下の狭い砂浜に降り立ちました。すかさず私たちも車から降り、ゆっくりとサバクヒタキに近づきます。幸い、警戒する様子はなく、波打ち際を歩いたり、流木に止まったりしていました。何かをついばんでいましたが、それが何だったのかはわかりませんでした。しばらく観察した後、サバクヒタキが少し離れた台地の雪崩防止柵の上に移動したところで、私たちもその場を立ち去

りました。

サバクヒタキは、中央アジアで繁殖し、インドやアフリカ東部で越冬します。日本には稀な旅鳥または冬鳥として渡来しますが、北海道ではこれまで一例(1994年10月天売島)しか記録がありませんでした。今回の観察は、本道2例目の記録と思われる。今回の個体がなぜ初冬の北海道に迷行してきたのかはわかりませんが、無事に越冬地に辿り着いていることを願うばかりです。



サバクヒタキ 2016年11月4日 北海道稚内市宗谷村
頭部から上面が砂色であること、眉斑がないこと、尾羽上面全体が黒いことから他の国産サバクヒタキ類と識別可能。頬や目先が黒っぽいことから雄



ウトナイ湖

2016. 11. 13

【記録された鳥】 マガン、シジュウカラガン、コブハクチョウ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カイツブリ、カワウ、ダイサギ、シロカモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、チュウビ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ハクセキレイ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ホオジロ 以上32種

【参加者】 今堀魁人、井山幸大、大坪和憲・ミヤ子、鹿川美咲、金子喜映・洋子、北山政人、笹森繁明、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、谷岡康孝、辻 雅司、畑 正輔、原 美保、樋口孝城、美頭佳範、藤田 潔、本杉政司・朋子、吉田慶子、鷺田善幸 以上24名

【担当幹事】 北山政人、鷺田善幸

野幌森林公園

2016. 12. 4

【記録された鳥】 トビ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマガラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ、アトリ、ウソ、シメ 以上18種

【参加者】 今村三枝子、大表順子、笠井好美、川村宣子、岸野一法、木村 宏、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、笹森繁明、品川睦生、島崎康広、白澤昌彦、墨谷 啓、高橋貞夫、辻田捷紀、戸津高保、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、美頭佳範、樋口孝城、平岡信夫、福島 文、辺見敦子、松原寛直・敏子、松原令子、三井 茂、本杉政司・朋子、山本育子、山本昌子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、吉見孝夫・紫乃 以上38名

【担当幹事】 早坂泰夫、松原寛直

小樽港

2017. 1. 22

兵庫県尼崎市 山藤 京子

私は、現在兵庫県に在住しております。小樽探鳥会を知ったきっかけは「北海道野鳥観察地ガイド」に探鳥地として小樽の漁港が紹介されており、是非とも行ってみたいと思ったのですが、雪道の車の運転は不安で自力ではとても行けないな…と思い、ネットで調べていると北海道野鳥愛護会のバスツアーを知り、思い切って参加を申し込みました。

当日はまずまずの天気で一安心しました。最初のポイント祝津漁港に着くまでにバスの中でコケワタガモの雌がいる事を聞き、フィールドガイドで調べてみます。正直、雄と比べると地味だな～と思っていたのですが、実際に見る

と普段見ている淡水ガモとは違う姿に感動！目立つ白帯2本が印象的で、地味だと思った事を反省しました。祝津漁港では、到着早々オオワシが飛翔しており、関西の探鳥地とのスケールの違いを感じました。また、初見のワシカモメや、今までは遠くを飛んでいる所しか見た事がなかったオジロワシの止まり姿を見る事が出来、満足感をえました。

日和山灯台では、遠くではありましたが初見のウミガラス等を見る事が出来ましたし、高島漁港ではワシカモメの識別点を教えて貰い、次見る機会があれば、バッチリ識別できそうです。また、シノリガモも行く先々で見ることが出来ましたが、綺麗な成鳥雄を見るのは初めてで不思議で綺麗な模様とうっとり出来ました。残念だったのは、最後の観察地点でハギマシコを見られなかった事です。雪があまりにも降って来た為に途中でバスに戻ってしまいました。ハギマシコを見るのを次の目標としたいと思います。今回楽しく探鳥出来ましたのも案内して下さいました皆様のお蔭です。有難うございました。機会があれば、又参加したいと思います。



コケワタガモ(雌) 2017. 1. 22 小樽市祝津漁港 撮影 辻 雅司さん

※編集部注：コケワタガモは、北海道野鳥愛護会の探鳥会としては初記録です。

【記録された鳥】 マガモ、キンクロハジロ、スズガモ、コケワタガモ、シノリガモ、ビロードキンクロ、クロガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、オオハム、シロエリオオハム、ヒメウ、ウミウ、ミツユビカモメ、カモメ、ワシカモメ、オオセグロカモメ、ハシブトウミガラス、ウミガラス、ウミスズメ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ツグミ、スズメ、ハクセキレイ、ハギマシコ、カワラバト(ドバト) 以上33種

【参加者】 新井敏明、池端耕治、今村三枝子、井山幸大・愛瑠、岩井 茂、白田 正、梅木賢俊、太田由美子、岡部良雄・三冬、数田真弓、菊池文子、菊池るみ子、北山政人、栗林宏三、媚山陽子、佐賀テエ子、佐々木恵子、山藤京子、品川睦生、新城 久、鈴木勝之、鈴木恵子、高橋貞夫・芳子、竹内 正、辻 雅司・方子、中田勝義、葦沢千代、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、藤岡千鶴江、松原寛直・敏子、丸島道子、水永優紀、村田睦子、本杉政司・朋子、横山加奈子、吉田慶子、吉本はるみ 以上46名

【担当幹事】 梅木賢俊、栗林宏三、畑 正輔

野幌森林公園

2017. 2. 5

【記録された鳥】 トビ、オジロワシ、フクロウ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、クレンジャク、ヒレンジャク、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、マヒワ、ベニヒワ、ウソ、シメ 以上22種

【参加者】 阿部 徹、和泉ケイ子、今村三枝子、内山恭子、金子喜映・洋子、川村宣子、栗林宏三、後藤義民、齊藤由美子、佐藤啓子、品川睦生、新藤千里、辻 雅司・方子、戸津高保・以知子、富川 徹、鳥屋祐樹、中田勝義、中田達哉、畑 正輔、早坂慶子、早坂泰夫、美頭佳範、廣木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、三井 茂、本杉政司・朋子、山本育子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子

以上36名

【担当幹事】 早坂泰夫、松原寛直

鳥民だより

◆ 野鳥写真展と写真募集のお知らせ

会 場：札幌エルプラザ 2階 展示スペース
(札幌市北区北8条西3丁目)

JR札幌駅地下直結または北口出口の北向い

期 間：平成29年5月10日(水)～5月23日(火)

展示時間：9:00～22:00

(ただし初日は17:00から、最終日は16:00まで)

応募要領：写真は、最近3年以内に北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付してください(原則としてお一人2枚以内とします。3枚以上の場合は展示優先順位を明記してください)。

募集締切：4月28日(金)までに、右記の愛護会事務所に送付または持参してください(必着)。

(〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5階 自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 宛て)

準備・展示作業：

5月10日(水)13:00から事務所にて額付・キャプションを作成し、引き続き15:00から会場にて展示作業を行います。お手すきの方はご協力をお願いします。

*なお、引き続き野幌自然ふれあい交流館で6月に1ヶ月間の展示を計画しております。

【お問い合わせ】 畑 正輔 (011-894-0017)

◆ 総会のご案内

日 時：平成29年4月12日(水) 18:30～

場 所：かでの2・7 110会議室(1階)

(札幌市中央区北2条西7丁目)

※総会終了後に懇親会を予定しています。

【お問い合わせ】 畑 正輔 (011-894-0017)

【新しく会員になられた方々】

立松 克己(香川県高松市)

小海 康夫(札幌市北区)

鈴木 勝之(札幌市南区)

高畑 政敏・百合枝(札幌市西区)

佐藤 啓子(札幌市中央区)

中畑 真(札幌市豊平区)

山藤 京子(兵庫県尼崎市)

大内 康典(札幌市厚別区)

藤岡 千鶴江(札幌市北区)

媚山 陽子(札幌市手稲区)

五十嵐 国勝・悦子(札幌市清田区)

平岡 信夫(東京都品川区)

早坂 慶子(札幌市厚別区) ほか1名

◆ 宿泊探鳥会について

今年の宿泊探鳥会は、秋に十勝方面を計画しています。この時期の十勝川下流域ではマガン、ヒシクイ(亜種オオヒシクイ)のほか3桁までに回復したシジュウカラガン、ハクガンなどを見ることができます。

日 程：10月21日(土)～10月22日(日)

宿泊先：十勝川温泉 ホテル大平原

詳細な内容及び募集については、次号の「北海道野鳥だより」188号でご案内いたします。



表紙の鳥

ユキホオジロ

(カラー写真は<http://www.aigokai.org>に掲載)

何時もの鳥見のコースを車でゆっくり移動していた。前方の枯れた草むらから、10羽程の白い小鳥が飛び上がりゆっくり旋回して車の横7～8m程の所に下りてくれた。双眼鏡で見えていた助手席の妻が「ユキホだ、ユキホだ・・・」と大声。飛び去るまでの数分間、夢中でシャッター切り続けた。

高畑 政敏(札幌市西区)

編集部からの訂正とお詫び

前号(186号)P8に「カムリウミスズメ」とした写真と記事は、「ウミスズメ」(繁殖羽)の誤りでしたので、

訂正し、お詫びします。先崎理之さんから識別等についてアドバイスをいただきました。厚くお礼申し上げます。



- ☀ 探鳥会（宿泊探鳥会を除く）は、どなたでも参加できます。参加費無料。事前申し込み不要です。直接、現地に集合してください（昼食、双眼鏡等の観察用具、筆記具等をご持参ください）。
- ♣ 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
- ☔ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します（小雨決行）。
- ☀ 探鳥会の開催を変更・中止する場合がありますので、愛護会のホームページでお確かめください。
- ♣ 交通機関の運行時刻等については、最寄りの営業所等にお問い合わせください。

【探鳥会の問い合わせ】

北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 10:00~16:00（土・日曜日、祝日を除く）

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月16日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 9:30
	中央バス：地下鉄東豊線環状通車駅発（北札苗線）「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月23日(日)	宮島沼	湖畔 10:00
	中央バス：岩見沢ターミナル発（月形行）又は月形駅発（岩見沢行）「大富農協前」下車、徒歩10分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月29日(祝)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	夕鉄バス：新札幌駅発（文京台南町行）「大沢公園入口」下車、又はJRバス：新札幌駅発（文京台循環線）「文京台南町」下車、徒歩各5分。 夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(祝)	藤の沢	白鳥園（エルクの森パークゴルフ場向い）9:00
	定鉄バス：札幌駅又は地下鉄真駒内駅発（定山溪温泉行又は豊滝行）「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。 藤の沢小鳥の村とその周辺をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月7日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月29日の案内を参照してください。 木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月14日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 8:00
	公共交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミが出現することもあります。	
5月21日(日)	鶴川河口	むかわ温泉四季の館駐車場 9:45
	道南バス：札幌駅前又は大谷地バスターミナル発（浦河行/ペガサス号）「四季の館前」下車。 鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
5月28日(日)	野幌森林公園	大沢口 6:00
	早朝のため公共交通機関はありません。 昨年からはまった早朝探鳥会です。夏鳥の囀りを聞きながら早朝の森を歩きます。春の草花も真っ盛りです。	
6月4日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 9:10
	JR千歳線「植苗」下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月11日(日)	厚別川	川下公園駐車場 9:00
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発（川下線）「川下公園」下車。 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月18日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月29日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月25日(日)	福移	福移小中学校前 9:00
	中央バス：地下鉄東豊線環状通車駅発（北札苗線）「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点で草原の鳥たちを楽しみます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>